２０２７年国際園芸博覧会政府出展懇談会（第１回）発言要旨

日　時：令和４年12月１日（金）14:00～16:00
場　所：中央合同庁舎３号館６階国土交通省都市局局議室

- テーマが「幸せを創る明日の『風景』」とあるように、農水省と国交省とで一緒に検討を進めていくことが重要。
- この種のイベントは、「イベント・オリエンテッド・ポリシー」が非常に重要。
- 自然を扱い、自然との共生をテーマに掲げている以上、音と映像で無機質的な空間を作るのではなく、開幕時にはある程度、植物が自生している様、早めの植栽を行う必要がある。
- この種のイベントの多くは動員数目標を立てて達成度合いを計るが、目標値は数字ではなく、国民にとっての新しい意識改革、本当の意味での21世紀型社会の描き方、ショーウインドウとしてつくっていく必要がある。
- 来場者数をカウントするなら、会期中だけでなく、「明日」（その後の未来）のところまでカウントし、長いスパンでものを見ようという新しい哲学を出してはどうか。
- コンセプトをいかに空間に作り変え、人々に還元し、視覚的なインパクトを与えていくのか、どのくらいの年齢層をターゲットにしているのかが気になった。
- 従来のスクラップ＆ビルディングの概念ではなく、レガシーとして、何を残していくか、分配していくかを念頭に議論を進めることが重要。循環のイメージが博覧会を通して見えれば、新しい時代の博覧会ということが伝わるのではないか。
- 国際情勢や国内財政状況などを踏まえ、大阪・関西万博から間もない国際博覧会になることから、しっかりとした大義を持つことが重要で、政府出展の役割は大きい。
- 「自給、自尊、自立」といった理念があると良い。
- 農業は国の存立基盤であり、食料自給率を上げることはもちろんのこと、その前にやることは、国民が自給するということ。花や植木を育てることを含め、国民の自給への概念をおおいに高める博覧会であって欲しい。
- 自尊について、我が国の人々が、食料を含めて、植物とどの様に関わってきたのかという歴史、文化、伝統、積み上げてきた技術、知識、さらには、価値観、美意識までを振り返るような政府出展にして頂きたい。
- 自立について、すべての生き物と「とも生(う)み」をしてきた本質的な日本人の自然(じねん)観(かん)を取り戻し、全国津々浦々の地域が自立して、それを支える農業生産者、造園技術者、林業技術者等に声援を送り、その営みを続けていただくことで国土を未来に継承できると考えている。決して横浜だけでなく、国土全体すべてに光があたる政府出展にして頂きたい。

- 本博覧会の事業構造を成り立たせるために、都市公園事業の基盤は非常に重要であり、公園計画上で庭園や園地の整備が予定されている場所に、博覧会時までには庭園や園地を整備せず、造成地に仮設で出展物を建設した後に、閉幕後に政府出展を都市公園事業で庭園や園地を整備するというのは極めて効率が悪い。
- 近年の国際園芸博覧会への政府出展は、農水省・国交省が一体となって出展を果たしてきたが、できれば、場所については、出展形態として一体型、農水省・国交省それぞれの分離型のどちらが良いのか、前提条件なしに検討を頂きたい。
- 是非本博覧会および政府出展を通して、国民の皆さんが国を見つめなおす機会にして頂きたい。
- 博覧会の位置づけについては、基本的に今後どういう時代をわれわれが見据えていくのか、日本をどう形づくっていくかがとても重要となる。
- 少子高齢化により都心でも空き家が増える状況になる。都市のグリーン化により、都市を住みやすい場所にし、その中に農もあるという考えが必要。
- 都市近郊での農作物の需給体制を作っておけば、大地震等の自然災害が発生した場合も、都市農業は防災として大きく役立つ。特に、環境的に恵まれている横浜市は、未来の都市・未来の住居環境としての新たなモデルケースを示すポテンシャルがある。
- ただ単に公園をつくるだけではなく、暮らしを体現するような空間ができるととても面白い。
- 全面的に打ち出したいのはサステナビリティ。SDGsは、2027年時点で、目標年が３年後に迫っており、おそらくポストSDGsになっている。そういう意味でサステナビリティが全面的に出せるようになって欲しい。
- それを前提とし、１点目は、住まい、暮らし、食といったところの等身大の暮らしと繋がるような農と園芸の姿を世界に見せられないか。部分的に切り取られた農や園芸ではなく、日本は生態系を自然の恵みとして上手に使ってきた。
- 自然とのしたたかな付き合い方は日本らしいと考えており、くらしと繋がるということを意識して、２項対立でない自然との付き合い方、その知恵を示せるように実現して欲しい。
- ２点目に、政府出展だけではないが、５年後になると、より進化するものもあれば、より廃れていってしまうものもある。その時間軸を意識しておきたい。
- 廃れていく可能性のあるものから３点。１つ目は、自然を活用してきた日本の自然と技、例えば、竹林の活用やそれを使って工芸品。２つ目は、国内の在来種を扱えるような工夫、例えば、赤カブなど。３つ目は、日本の優れた花きや果物の栽培技術。
- 進化していくトレンドでは、グリーンインフラとしてOECM 30by30を意識して見せるほか、みどりの食料システム戦略を繋がりとして見せていきたい。それからサーキュラーエコノミー、VRも見せていきたい。
- テーマのキーワードについて、「めぐる、かもす、縁起、環世界、つながり」のようなキーワードがニュアンスとして入れば良いと考えている。

- テーマ設定のキーワードについて、国際的な博覧会として考えたときに、日本語がどの様な英語・多言語的な表現になるかを冒頭から考慮すべき。
- 微細な表現として、例えば、「調和、融合、統合、総合」の４つのキーワードに関しても、少しずつニュアンスが違うものとして日本人には伝わるが、これをどんな言葉で表現していくのか、これは、メッセージとしては重要。
- 入場者数ではなくて、訪れた人々がその場所で何を感じたのかを把握することが大切。この博覧会で大きなテーマになるのではないかと考えている。
- 皆が何を考えたのかを可視化することで広がる可能性がある。
- Ａ１クラスの国際園芸博覧会ということで、胸を張って皆さんに見ていただけるような博覧会にしなければならないし、そのための政府出展でなければならない。
- 1990年大阪花の万博はバブル期ということもあり、非常に景気がよかったが、今回はそうではない。時代背景を踏まえたエッセンスが示せるような政府出展にしていければ良い。
- コンセプトなどは、園芸以外でも農業について幅広く扱っていただいているような構想になっており、ありがたい。
- 都市農業など、良い地域ネットワークがあり、来場者がそのネットワークに入れるような、来やすくなるような政府出展を考えても良い。
- いけばなそのものや公園の花壇に咲いている花も、言ってみれば、自然の生物多様性を人間が文化的にうまく利用した事例の１つの頂点のようなもの。
- 切り花であっても、輸入の花であってもそれはそこでつくっているもののメッセージ、生きものとしてのメッセージがくると考えた方が良い。
- 今回の博覧会は、SDGsの目標年の３年前であり、達成状況や課題などを把握している頃、SDGsの後継が議論されている頃。
- 大阪・関西万博の後を受けて技術的進展や、実際の利活用等が試される中で、個人的には、生物多様性については情緒的にしか国民の理解が進んでいないと感じている。例えば、花が咲くことについては、どういうバイオフィジカルなメカニズムがあるのか、また、この地区の生物多様性を語るような調査を事前に行い、どういう関係があるのかを体験できるようなことが出来たら良い。
- 農水省のみどりの食料システム戦略や国交省のグリーンインフラは、看板施策として当然やらなければならないことであり、それが2027年にどうなっているかということもあるが、そのあたりを政府出展として意識した展示をしていくのが一番。
- 先日みどりの食料システム戦略について勉強する機会があったが、この博覧会そのものの内容だと思った。
- 農林水産技術会議事務局あたりは、いろいろ研究している。そういった組織からの提案や、技術をアピールしたい研究者・法人からの知恵を集めるのも良い。
- お花見やお盆の盆花など、花は季節の年中行事の中で非常に生活に密着しており、花より団子というように、お花を見ながら食べ物を食べるというのが特徴の１つ。

- 昔の人は、桜の花が山に咲いてくるのをみて、寒い季節から春の季節になることで、生命力の活性化を感じていた。
- ただ見て綺麗だとか、あるいは農作業が始まる時期や今年が豊作かどうかを占うなどいろいろな見方があるが、一番大切なのは、見たり、あるいはつつじなどをとってきたり、そして髪に刺したりして、人間の生命力を活性化する意味。
- 昔はお盆にミソハギという花をとってきて、家で飾り、そこに仏さまが一緒に移ってくるという、生者と死者の世界の交流、つなぐ役目としての花が基礎としてあった。そういった自然観というものを表現し、日本の伝統文化、祭事というものを表現できればと思う。
- テーマ設定のためのキーワードについて、活力や活性化、生命力、キーワードには難しいが生者と死者の交流など、強めなものあっても良い。
- 最初に政策展開を牽引するという言葉があったが、今、日本の置かれている立場は、円安であり、負債も膨らみ、GDPも上がらないということで、生命線としては農水省がまとめている施策の１番目に出ていた食料安全保障の問題が重要になっているかと思う。
- 複雑な世の中の構造というものは、デジタルでしか表現できないので、今回の博覧会は国民の皆様にご理解いただくには良いチャンスだと考えている。
- メタバース空間等の新しい技術を活用して、共感として感じてもらい、例えば子供たちに農業をやってみたいという気持ちになってもらうことが非常に重要。
- 気候変動、カーボンニュートラル、ワンヘルス、カーボンフットプリント、バイオダイバーシティなどは大学の得意分野であり、大学との連携等の配慮も検討頂きたい。
- 資料では、政府出展に対してどんなことを社会が要求しているかが分かる。中身については、今後充実させる必要があると思うが、全てではなくこの中のどれを強く打ち出すかを含めて、次回の懇談会までに作業していただきたい。
- 菊竹清訓さんの、「か」、「かた」、「かたち」という、三段階の考え方がある。この懇談会ではコンセプトとなる「か」の部分を主に議論するが、コンセプトから少し具現化する「かた」まで多少議論しないと、次の「かたち」にする２つの分科会が機能しないだろう。
- 政府出展の理念とキーワードについては、「日本の暮らしを支えてきた自然観の再評価」とあるが、「再評価」というより「見直し」ではないか。自然を征服するという段階があり、自然は征服できないということに気づいたうえで、この見直しというのは、自然に責任を持つということにあたろうかと思う。そういう段階に来ていることを、政府出展の理念にするべきだと思う。
- 「自然と人・社会との関係性の最適解」の部分について、例えば、政府出展を国交省と農水省が担当するのであれば、調整区域の線引きみたいなことが、どうあるべきか、縮減社会の中で、そういった接点部分の見せ方が、今回のモデル的な議論の中で出来たらと思っている。
- テーマに関して、既に意見が出ているが、英語表現はしっかり意識するということは同感。

- 「調和、融合、統合、総合」とあるが、そこに必要なのは集約という概念。
- 農水省の政策では、生産がキーワードになっているが、国交省は生活が中心となっている。生産・生活に、生命という言葉を追加し、命の問題やバイオフィリア、トポフィリアなども欲しい。
- 先ほど申した両方の関連図（資料４の７ページ）にも流域治水という言葉もあるが、気候変動の中でここは確かに大事。
- 小農のようなものが、ひとつのテーマとなって、新しい生命・生活につながるような政府出展があっても良いのではないか。
- 大農と小農の違いについては先ほどご発言があったが、従来とは違い、どれかという選択の時代ではなくなってきたと思う。ダイバーシティとはまさにそういうこと。
- 農業を考えるときには、食から入らないと消費者や生活者は関係なくなってしまう。食であれば、国民全員に関係がある。そのため、食から入って農の大切さを理解してもらう、そうすれば環境もよくなる。
- 例えば、自然再生推進法というのは複数省が共管。景観法も同様。各省で細分化され、どうしても自分の目の前の仕事をやらないといけなくなる。本日のコンセプトのような話はだいたい全体で共有できるが、具体的な話になると違ってくる。それをどうするかというのが今後の１つの課題であり、少なくともこの博覧会に関わる事務局は皆同じものを共有してもらいたい。
- 例えば民俗の話は国民であれば日本人には皆大体通じる。逆に、外国の方には通じない。来る人によってアピールする内容は変わることを想定しておく。会場計画でいえば、来場者も好きなものを選べば良いようにすれば、人が特定の箇所には集中しなくなる。
- 今の日本は高齢化や高学歴化という、ある種の経験を積んで、自分なりの価値観を持つようになった時代。自然に関心を持っている人は生き物のことはやるが、エネルギーのことは知らない。都心に住んでいる人は、農村のことを軽視してしまうし、その逆もあるだろう。そうした点から、全体像を見せる機会として、この博覧会はちょうど良い。
- 時間に制限があり、会場計画で、この辺りは全部緑地で、木を植えれば良いという所だけは今からどんどん植えておくとよいが、そういうラフなやり方、手法はあり得るのか。役所の場合は、設計図が全部できないと予算が付かないし、発注できないかも知れないが、そういうシステムそのものも機械的な発想で実は問題。
- 今までのイベントは全部支柱だらけの風景になっている。一番大事なのは、これがきっかけとなって成長社会ではなく、成熟社会の国の政策や市民との関係、国民に対するサービスや技術的なすごさ、市民の活動の話など、領域を超えて、プロダクトやライフスタイルも皆一緒と捉えること。実は一言でそれを言うと、日本の農村社会がそうであった。広く物事を考えてもらいたい。
- 微地形をそのまま活かしているのが日本の庭園。場所の良さを活かしながら、いろんなことを考えてやって良い。今まではどちらかを指定してどちらかを取

るという選択だった。逆に何でも受け入れ、「新しい時代はこうあった方が良い」というプランを色々出してもらいたい。

- 政府出展の理念の部分でいえば、「自然観の『再評価』」ではなく「見直し」にするとか、「将来像」は「明日の風景」を指すのだろうが、「将来像」という意味は非常に広い。
- これまでの博覧会は会場に行って何かするということだったが、今回の政府出展のコンセプトでいえば、国民や市民は深く関わる。国民全部が参加できる仕組みが欲しい。今は情報化社会なのでそういったツールは多くある。直接対面する、触る、育てるということを申し上げたが、一方でエネルギーや移動の問題もあるので、両方を包含するようなモデルを出してみる。最適解の部分は「構築する」等のわかりやすい表現にしてもらいたい。
- ウェブツールにより、いまから博覧会、政府からの自然共生社会的な、すなわち食・農・花緑生活・都市自然・トータルランドスケープへの具体的メッセージを、社会全体に発信すべきだろう。

以上